

# エリアーデの死生観

奥山 史亮

(北海道大学大学院文学研究科博士課程)

## (和文要旨)

本論では、エリアーデの死生観を検討することにより、エリアーデ宗教学の今日的意義について考察する。特に、晩年のヒエロファニー論である「現代世界の神話」を今日の生と死をめぐる議論の中に位置づけることで、その新たな解釈の可能性を模索したい。エリアーデ宗教学における死をめぐる議論は以下の2点に収斂される。(1) 死は生の終局的断絶ではなく、現世とは異なる地平へ移行する契機である。(2) 死を超えた場所、すなわち死後生において、生命は超現世的な存在様式を獲得して存続する。「現代世界の神話」は、このような循環的な生命観を現代社会に再定位することで、新たな死生観を構築しようとするエリアーデの試みだと私は考える。その試みは、エリアーデにとって焦眉の課題であった。現代社会では、かつて死を飼いならしていた装置は機能しなくなり、現代人は如何に死に対処すべきか途方にくれているとエリアーデは考えたためである。その新たな死生観が有する機能を本稿では、「他者との絆の構築」と「生の意味の変容」という二つの観念によって表すことで明らかとしたい。

## (SUMMARY)

What did Eliade think about life and death? This is the topic of this paper. For the purpose of showing new way of explanation of Eliade's vision, I will reconsider "Myth of the Modern World" with a full understanding of today's discussion about life and death. In Eliade's vision, death is regarded as initiation that is indispensable to move to another dimension. It's contemplated that "Myth of the Modern World" is his attempt to introduce such idea of death into modern society. For Eliade, this is an urgent problem. Eliade thought that people of today don't know the way of coping with death. Therefore, "Myth of the Modern World" is considered as new idea of death for modern society. In this paper, I will prove the function of this idea and represent its as "strengthen the bond with another" and "break out of the paradigm of life".

---

## 1・はじめに

本稿では、人間による生の営みをエリアーデは如何に理解していたのか、という問題について考察する。エリアーデは、宗教的シンボルや神話的イメージを宗教学的に解釈することで、未知の文化を理解しようと努める。しかしエリアーデが意味する「理解」(understand, comprendre)とは、未知の文化形態を宗教学によって説明することのみを指しているのではない。未知の文化圏における世界解釈と遭遇することや異なる宗教形態を知ることによって、それまで自己が保持していた価値体系が拡大・変容されること。このような自己変容が、エリアーデの意味する「理解」である。そして自己の世界観へ執着することをやめて、このようなアイデンティティの変容を受け入れることが、現代を生きる人間にとって望ましいヒューマニズムであるとエリアーデは主張する<sup>1</sup>。エリアーデの宗教学は、人間の生き方に対するこのような問題提起を根底において展開されているといえる。従って、その生き方に対するエリアーデの問題意識を考察することは、彼の宗教学の全体的把握にとって不可欠な作業である。

一方、人間は如何に生きるべきかという問いは、常に如何に死ぬべきかという問いと表裏一体である。人間がどのように死を受容するかは、その人間がどのように生を理解するのかということと不可分であるためである。そのため考察すべき問題は、エリアーデが提示する生の営みにおいて死は如何に位置づけられているのか、という問いである。

---

<sup>1</sup> M. Eliade, *The Quest: History and Meaning in Religion*, Chicago: The University of Chicago Press, 1969, p. 3. 前田耕作訳『宗教の歴史と意味』、せりか書房、1987年、17頁。また、日記断章には以下の一節がある。「現在執筆中である論文では、真の宗教史、すなわち真正であり、想像力を駆使する解釈学は人間を変革する(何故ならばそのような書物を読むことは覚醒作用を惹き起こすため)という事実を強調する必要があると思う。そしてまた、(現在の多くの)宗教史家たちが、古代的、異国的であり、常軌を脱した「恐ろしい」宗教的状况を理解し、解釈しようとすることで自分の心の平静や均衡を危険に晒していないことは明白である—彼らは自分の信仰のうちに、または最も瑣末な唯物論のうちに引きこもっているためである。しかし私は、古代の神話や象徴を省察することによって及ぼされる影響の重要性をいつか明示する必要がある。内面を通じての変化こそが、「学者」が理解さえしないことである」(Eliade, *Fragments d'un journal I*, Gallimard, 1973, p. 473. 石井忠厚訳『エリアーデ日記(下)』、未来社、1986年、250-251頁)。

## 2・研究の方法

まず、エリアーデが如何に死を描写しているのかという点に注目する。エリアーデの著作は以下の3タイプに分類できる。(1) 宗教研究のための研究書、論文。(2) 文学作品。(3) 日記、自叙伝。それぞれの文献において、エリアーデによる死の描写を分析する。しかし、研究者が学術研究に従事する場合、その研究者の人生観が直接研究に反映されるわけではない。多くの場合、研究者は両者を区別しようと努める。従って、エリアーデの死生観を検討する場合、まずこれら3タイプの資料に記述されている死生観を区別して精査し、その後それらがどの程度一致するか考察する必要がある。よって本稿では、以下の手順に従って考察を進める。(Ⅰ) エリアーデは、宗教研究や文学を離れた場において如何なる死生観をもっていたのか。(Ⅱ) エリアーデの死生観は、彼の宗教研究や文学に対して如何なる影響を与えたのか。(Ⅲ) Ⅰ、Ⅱを検討することによって提示されるエリアーデ宗教学の一側面は、現代宗教学において如何なる意義を持ち得るのか。エリアーデ宗教学の新たな解釈の可能性を模索する考察対象として、本稿では、晩年のヒエロファニー論である「現代世界の神話」を取り上げることにする。

## 3・日記断章、自叙伝における死の描写

まず日記と自叙伝 (*Fragments d'un journal I, 1945-1969, Gallimard, 1973. Journal III, 1970-1978, Chicago: The University of Chicago Press, 1989. Journal IV, 1979-1985, Chicago: The University of Chicago Press, 1990. Autobiography, volume I, The University of Chicago Press, 1981. Autobiography, volume II, Chicago: The University of Chicago Press, 1988.*) を検討することで、エリアーデが宗教研究・文学を離れた場において如何なる死生観をもっていたのか明らかにする。

自叙伝には、第一次世界大戦にルーマニアが参戦した1916年、ブカレストの街がドイツ機によって空爆される様子が記されている。当時小学4年生であったエリアーデは、隣人が爆死するという出来事に遭遇した<sup>2</sup>。強大な武力を前にして、為すべなく殺される人間の様は、少年エリアーデの脳裏に深く刻みこまれたことと思

---

<sup>2</sup> Eliade, *Autobiography volume I*, Chicago: The University of Chicago Press, 1981, p. 25. 石井忠厚訳『エリアーデ回想(上)』、未来社、1989年、36-37頁。

われる。また自叙伝の第 15 章は「〈集団死〉の謎」と題されている。そこには、ドイツ空軍によるロンドン空襲時に防空壕へ避難したエリアーデが感じた死の恐怖について記されている<sup>3</sup>。その死の恐怖とは、名前も知らない多数の人間と共に、強制的に自己の存在が否定されるというものであった。強大な武力によって翻弄され、生命が断たれるという死の不条理さを、エリアーデは身をもって体験していた。しかしエリアーデは、死の不条理さに脅かされるだけでなく、それに対して積極的に応答することをも試みていた。エリアーデの高弟ヨアン・クリアーヌ (Ioan P. Couliano 1950 - 1991) は、エリアーデの死を哀悼する文書において、以下のように記している。

私の『日記』からの抜粋。1986年4月4日、クリスティネルとミルチア・エリアーデ宅で、女性物理学者サンダ・ロガと共に過ごした晩に関する部分。「ミルチア・エリアーデは「生の後の生」に関する文献を多数読んでいて、死は「光のしるし」であると確信している。彼はそのことを何度も繰り返している。(中略)。実をいえば、そこにこそ 30 年有余のエリアーデ文学の大主題がある」<sup>4</sup>。

このクリアーヌの報告が示すように、エリアーデの日記には、死への関心、特に死は生の終局的な断絶であることを否定しようとする思索が記述されている。例えば、1951年12月8日付けの日記には、死を前にしたアンドレ・ジッドの態度に対するエリアーデの感想が述べられている<sup>5</sup>。その記述によれば、ジッドは死を他の現象や行為が終了することと質的に変わらない一つの「終わり」でしかないと理解していた。それに対しエリアーデは、自分が彼の立場に置かれたならば「何か他のことを考えるであろう」と述べている。それでは、実際に死を強く意識した場合、エリアーデは何を考えたのであろう。

1955年2月21日付けの日記には、病症の自覚により死の恐怖を突然に突きつけ

---

<sup>3</sup> Eliade, *Autobiography volume II*, Chicago: The University of Chicago Press, 1988, pp. 6-7. 石井忠厚訳『エリアーデ回想(下)』、未来社、1990年、14頁。

<sup>4</sup> ヨアン＝ペトル・クリアーノ「ミルチア・エリアーデ最後の日々」、(『エリアーデ回想(下)』)、240頁。

<sup>5</sup> Eliade, *Fragments d'un journal I*, p. 164. 石井忠厚訳『エリアーデ日記(上)』、未来社、1987年、202-203頁。

られたエリアーデの心情が綴られている<sup>6</sup>。それまで積み重ねてきた死についての思索によっては、死が現実的な可能性となって迫り来る恐怖を払拭することは出来なかった。肉体が徐々に生命力を失っていき、死臭を放つようになるという生々しい死の恐怖に対峙するには、抽象的な思索は無力であることをエリアーデは自覚したのである。そのため肉体的、現実的な死のイメージをも統合した死について観想することにより、この恐怖に対峙することをエリアーデは試みる。

イニシエーションは死を経験することである。そして知的に考えられ得る全ての死は、一つのイニシエーションと等価である。しかし「象徴的死」は単なる苦痛、苦悶、病気等ではない。—それは自分自身を死体として経験することでもあり、私自身が忘れていた単純な事実との和解でもある。すなわち我々は単なる移行者であるのではない。我々はまた解体されるのであり、我々の肉であるこの死体を受け入れなければならないのである。(中略)。私をあるがままに受け入れることによってのみ、私自身の死臭を引き受けることができる。そして、これもまた私の一部であることを受容することによってのみ死の恐怖に脅かされることはなくなるのである。このように価値付けることで、昨夜の恐怖は統合可能となった。この恐怖の内にイニシエーションの恐怖を認めたのである。私は、あの世で異なった形で甦るために、これら全ての試練を乗り越えなければならない、と自分に言い聞かせた<sup>7</sup>。

ここで言及されている「死体の経験」とは、生々しい死を正面から凝視して、その恐怖に対峙することだと考えられる。そのような体験を経ることは、生死に関する見方を変える故に、イニシエーションの経験、つまり存在様式の根本的変容に等しい。そしてそのイニシエーションを通過することで、異なる存在様式を備えてあの世に移行することが可能になるのだという。

これらの記述からは、以下のことが確認できる。(1) エリアーデは死を生を終局的断絶とみなすことなく、現世的な次元とは異なる世界への移行であるとみなしていた。(2) また、死のありのままの姿について観想し、その恐怖や不安に対峙することは、イニシエーションの経験に等しいとエリアーデは考えていた。では、

---

<sup>6</sup> Ibid., pp. 224-225. 前掲書、283-284 頁。

<sup>7</sup> Ibid., pp. 225-226. 前掲書、285 頁。

エリアーデによるこのような死の解釈は、彼の宗教研究と如何に関連しているの  
あろうか。

## 4・宗教研究における死

### (1) 植物・農耕のシンボリズム

周知のようにエリアーデの研究領域は非常に広大である。生死に関する記述は、彼の宗教研究における数多くの場所で確認できる。本稿において、その全てを取り上げることはできない。従ってここでは、植物・農耕のシンボリズムに関するエリアーデの考察に注目することにより、死の描写について検討してみたい。植物・農耕のシンボリズムに焦点を絞ることは、以下の理由による。

エリアーデ自身の報告によれば、農耕のシンボリズムへの着目とは、彼のインド体験による重要な成果である。エリアーデは、自身のインド体験の成果として、以下の3点を挙げている<sup>8</sup>。(1) インドには、従来西洋で強調されてきたウパニシャッドやヴェーダンタに代表されるクラシックな宗教営為以外の宗教文化があるという確信。(2) シンボルの宗教的意味への着目。(3) 前アリア人種に属する中央インドのサンタリの土着人に「新石器時代文化」を見たということ。第3の発見で言及されている「新石器時代文化」とは、インドの文化が単にアリア文化やドラヴィダ文化ばかりではなく、それらよりさらに下層のアジア土着文化を継承していることの発見である。その土着文化とは、農耕を生み出すことによって発展した新石器文化の遺産としての宗教文化である。このような文化的連続性の発見は、エリアーデをヨーロッパやアジアという「地方」に限定されない、「普遍的」な文化を模索することへと導くことになる。特定の価値観にとらわれない普遍的な宗教文化の探求とは、エリアーデが後年になって掲げた宗教学の理念と符合する。故に、農耕文化のシンボリズムについて考察することは、エリアーデ宗教学全体を再考するための切り口として適切であると思われる。本稿では、1949年にパリで刊行された『宗教学概論』(*Traité d'histoire des religions*, Payot, 1949) に基いて、植物・農耕のシンボリズムについて検討する。

---

<sup>8</sup> Eliade, *Ordeal by Labyrinth: Conversations with Claude-Henri Rocquet*, Chicago: The University of Chicago Press, 1982, pp. 54-60.

エリアーデは、農耕の発見は人類の経済面に多大な影響を与えただけではなく、精神面にも同等の影響を及ぼしたと考える。その精神面への影響とは、植物のシンボリズムにおける死と再生のイメージを中心とする宗教観念を普及させたことである。エリアーデによれば、植物の季節ごとの消滅と再生は、大地である母神への一時的退行とそこからの誕生という宗教的イメージを生じさせた。植物に宿っていた生命は、枯れて消滅することによって完全に断たれることなく、地中に一時的に退行することによって再生するためのエネルギーが付与されるのである。

植物におけるこのような循環的生命観は、人間の生命に対する見方をも変化させるものであった。その典型的な帰結が、「植物と人間の神秘的関係」というものである<sup>9</sup>。神秘的関係による神話モチーフの一つとして言及されているのが、民俗学者のいう3つのレモンの主題である。そのモチーフの概略は次の通りである<sup>10</sup>。(1) 不思議な力をもった娘(妖精)が不思議な果実から、または英雄が非常な困難を冒して獲得した果実(柘榴、レモン、オレンジ等)から生まれてくる。女主人公と英雄は結婚する。(2) 奴隷か、酷く醜い女が娘を殺して、その地位を奪い、英雄の妻になる。(3) 娘の屍から一本の木、または花が生える(あるいは、鳥か魚に変身した娘が醜い女に殺されて、その死体から木が生える)。(4) その木に実った果実から(あるいはその皮、または木片から)、女主人公が再生する。

女主人公は、生命が断たれるたびに、植物の姿をとって危機を脱する。それは植物のレベルへの一時的退行であり、女主人公は新しい形態をとることで「隠れて」生命を存続させるのである。このような神話モチーフは、以下のような死の観念を前提としているとエリアーデは考える。

死とは、普遍的生命の源泉と再び接触することである。我々は、これと同じ基本的な考え方を地母神や農耕密儀に関するあらゆる信仰の中に確認することができる。死は、存在様式の変化、別の存在地平への移行、宇宙の母胎への再統合にほかならない。もし実在と生命とが、植物的表現形式で表現されるならば、宇宙的母胎への再統合は単なる形態の変容によって行われる。つまり死者は、人間の形態から樹木の形態になるのである<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> Eliade, *Traite d'histoire des religions*, Payot, 1949, p. 302. 久米博訳『豊饒と再生』、せりか書房、1991年、226頁。

<sup>10</sup> Ibid., pp. 305-306. 前掲書、231-233頁。

<sup>11</sup> Ibid., p. 305. 前掲書、230頁。

人間が植物の存在様式に移行することで再生するという事は、生命の源泉がその植物に凝縮していることを前提としている。それは、人間は植物からのエネルギーが単に放射されただけの存在にすぎず、実在の基盤は人間ではなく、植物にこそ存するということをも意味している。そのため人間の生命が非業の死によって突如として中断された場合、生命は植物、花、実といった別な形をとって生き延びようとするのである。生命は、植物を軸として循環すると考えられている。

循環する生命というこのような宗教的イメージは、農耕の発達により一層劇的に展開された。耕作者は、農耕を行うためには、播種や芽生え、収穫などの季節のリズムに則って労働しなければならない。このような時間のリズムはひとまとまりの循環的サイクルをなしている。そのサイクルにおいて、農作物が育たない冬は終局的なものではなく、その後には豊饒な春が到来する休息の時期とみなされている<sup>12</sup>。このような時間サイクルに基づいて行われる農耕は、単なる労働ではなく、宗教的儀礼として営まれていた。すなわち大地は、農作物を生み出す地母神とみなされ、農耕における一つ一つの労働は、地母神との交流であると考えられた。

エリアーデは、このような大地のシンボリズムは、植物のシンボリズムと同様に、人間の生命観に影響を与えたと考えた。地母神は、農作物だけではなく万物に生命を付与するエネルギーの源泉と考えられたのである。そのことは、人間が大地から生まれたという神話モチーフや出産や分娩を大地の上で行うこと、または新生児を大地の上に寝かすこと、通過儀礼において新参者を大地の中に生き埋めにする事等々の宗教儀礼へと展開したという。自分を生み出した土地との神秘的結合というこの感情は、母なる大地の上で死にたいという希求へと至る。すなわち、人間は実存と生命の源泉である大地から一時的に生み出された存在にすぎず、死後はその源泉に回帰する。しかし回帰したその生命は、再びエネルギーを与えられ、異なる存在様式を備えて再び地上に生み出されるのである。生命は、大地を軸にして循環するのである。

## (2) ルーマニア・フォークロア研究

エリアーデは、以上の農耕文化的死生観はヨーロッパ、アジアを問わず普遍的に確認できる文化形態であることをインドにて確信した。このような確信に基づき、

---

<sup>12</sup> Ibid., p. 332. 久米博訳『聖なる空間と時間』、せりか書房、1996年、8頁。

インドからの帰国後、エリアーデはルーマニアの農耕文化の研究に着手するのである。その際にエリアーデが特に着目した民間伝承が「ミオリツァ」であった。「ミオリツァ」はルーマニア人に愛されてきた叙事詩である<sup>13</sup>。その内容を要約すると以下のようなになる。

小さな雌羊が自分の主人である若き羊飼いに、彼の羊と犬を妬んだ仲間の羊飼いたちが彼を殺そうと計画していることを知らせる。しかしこの若い羊飼いは、自分の身を守ろうとせずに、その雌羊に自分の最後の望みを以下のように告げる。死んだ後も子羊たちの側にいられるように、また自分の飼犬の声を聞くことができるように、遺体を自分の囲い地に埋葬してくれるようにと。しかし老母が自分を探している姿を見つけたら、彼女に「羊飼いは天国の一隅にある美しい国で、この世の許婚者、比類なき女王と結婚した」とだけ伝えるように遺言する<sup>14</sup>。

エリアーデは、「ミオリツァ」で示されている若き羊飼いの死に対する態度は、ルーマニア人の死生観を象徴していると考え<sup>15</sup>。宇宙を司る女王との結婚として死を理解するその態度は、生を諦めたものでは決してない。叙事詩では死を、新たな形態を得ることで巨大な宇宙的秩序の中に再統合される契機とみなし、喜びを持ってそれを受容するものだと解釈している。すなわち、「ミオリツァ」によって描かれている宇宙的結婚としての死生観は、或る悲劇的な運命による不条理な残忍さに対して与えられた力強く、独創的な返答なのであり、自己の不幸を個人の歴史的な出来事ではなく秘蹟的神秘として受容するものだとエリアーデは解釈しているのである。「ミオリツァ」について、後年同様の理解のもと、より詳細に論じた「千里眼の雌子羊」では以下のように述べられている。

ルーマニアの国民及び知識人たちがミオリツァ的ドラマへとよせるほとんど無制限の「賛同」は、従って理由なきものではない。このバラードを学校で習

---

<sup>13</sup> 奥山倫明『エリアーデ宗教学の展開』（刀水書房、2000年）の最終章「エリアーデとルーマニア」では、エリアーデによる「ミオリツァ」研究が後年の「歴史の恐怖」へと展開される過程について論じられている。本稿では、奥山倫明の研究を踏まえながらも、エリアーデのフォークロア研究を彼の死生観の地平で再考することで、新たな解釈の可能性を導き出すことを試みる。

<sup>14</sup> 以上の要約は、Eliade, *Von Zalmoxis zu Dschingis Khan*, Insel Verlag, 1990, ss. 235-236. 斎藤正二・林隆訳『ジンギスカンからザルモクシスへ・2』（せりか書房、1997年、193-194頁）による。

<sup>15</sup> Eliade, *The Romanians*, Bucharest: Roza Vînturilor Publishing House, 1992, pp. 48-49.

った知識人同様、それを歌い絶えず改良を加えてきた民間詩人たちもまた同様に、牧人の運命とルーマニア国民の間に存在する潜在的な親近性を無意識に感じていたのである。(中略)。ルーマニア人が、東ヨーロッパの他の国民と同様に、歴史上の侵略や破局に直面して応じたのは、正にこのような方法によってであった<sup>16</sup>。

以上の引用文からは、植物・農耕のシンボリズムを経てルーマニア・フォークロア研究に至る学的関心において、エリアーデは生に至上の価値を置くことが出来ない人間、生における苦境を死後生の観念を設定することで埋め合わせざるを得ない人間の状況を想定していたことが分かる。このような学的関心を基調とするエリアーデの宗教研究は、日記や自叙伝で確認した、死を生を終局的な断絶とみなすことがない死生観と共通する要因を有していると考えられる。

## 5・「現代世界の神話」再考

前節までの考察は、エリアーデの宗教研究による思索も、人間が生きることの果てにたどり着く死とは何なのか、という問いをその根底において展開されていることを意味している。従って、エリアーデ宗教学に対する評価は、肯定するか批判するかを問わず、それが基調としている生死に関するエリアーデの問いを踏まえたものでなければならない。本節では、前節までの考察を踏まえることで、エリアーデ宗教学の新たな解釈の可能性を模索する。その新たな可能性を見出す場を、私は「現代世界の神話」に見出したい。この「現代世界の神話」とは、『新エヌ・エル・エフ』の1953年9月号に発表され、後に1957年に出版された『神話と夢想と秘儀』に収録された論文である。それにおける議論は、偽装理論を前提として展開されている。偽装理論とは、後述するように、神話や儀礼と同じ機能を有している文化的営為が、現代社会では宗教を離れた場において営まれていることを論ずるものである。以下ではまず、偽装理論について概観する。その後、偽装に関する理論を生と死をめぐる議論のなかに位置付けることでエリアーデ宗教学の新たな解釈の可

---

<sup>16</sup> Eliade, *Von Zalmoxis zu Dschingis Khan*, p. 265. 『ザルモクシスからジンギスカンへ・2』、237頁。

能性について検討する<sup>17</sup>。

### (1) 聖なるものの偽装

聖なるものの「偽装」(Camouflage)とは、エリアーデが現代社会におけるヒエロファニーを論じるために用いた概念である。現代社会では、既存の伝統宗教の力は衰退した。そのため伝統宗教は、現代人に対する影響力を失ったとエリアーデは考える。よって宗教的シンボルにおいて顕現する聖に接触する機会は、現代人にとって稀なことになった。しかしエリアーデは、宗教教団の衰退と人々が宗教的でなくなることは同義ではないと考える。聖なる時間に参与することで不可逆的な俗なる時間から脱却したいと願うことは、人間の普遍的本性だからである。従って現代社会においても、神話や儀礼と機能的に等価な文化現象が存在しており、それらは前近代社会と同じように楽園へのノスタルジーや世俗的時間からの脱却という役割を果たしていると考えられる。エリアーデによれば、現代社会に潜んでいるそのような聖の偽装は、宗教学的解釈学を用いることによってのみ解読することができる。

1957年に出版された『聖と俗』の最終章「人間の生存と生命の浄化」には、「近代社会における聖と俗」と題された一節がある。そこでは、映画や小説におけるストーリー展開（善なるヒーローと悪の組織との闘争、乙女の救済等）が、残存している神話的構造の典型であり、聖の偽装とみなすことができると述べられている<sup>18</sup>。

<sup>17</sup> 偽装理論に関する近年の論文には、Robert A. Segal, "Are there Modern Myths" in *Changing Religious Worlds: The Meaning and End of Mircea Eliade* (ed. by Bryan Rennie), New York: State University of New York, 2001, pp. 25-32. や奥山倫明, "Camouflage and Epiphany: The Discovery of the Sacred in Mircea Eliade and Ōe Kenzaburō" (『エリアーデ宗教学的の形成前史に関する基礎的研究』、平成14年度 - 平成16年度 科学研究費補助金基礎研究(C)(2) 研究成果報告書、2007、5-26頁)がある。シーガルの論文は、エリアーデが提示する現代社会における神話が、自身が提示している「神話」の定義に矛盾していることを指摘している批判的研究である。奥山の論文は、エリアーデの聖なるものの「偽装」や「顕現」という概念が、大江健三郎の創作活動において重要な位置を占めていることを指摘したものである。

<sup>18</sup> そこには以下のように述べられている。「『夢の製造工場』である映画は、無数の神話的主題を用いる。すなわち英雄と怪物の戦いや加入式における戦闘と試練、典型的な人物像や象徴（「乙女」や「英雄」、楽園的風景、「地獄」等）などである。読書すら或る神話的機能を有している。それは、古代社会における神話の語りやヨーロッパの地方共同体に今日まで存続している口伝文学に取って代わるだけではなく、なによりも「時間から脱れ出る」可能性を近代人に与えるのである。そのような読書の機能は、かつて神話が果たしていた役割に類似している」(Eliade, *Das Heilige und das Profane*, Insel Verlag, 1998, s. 177. 風間敏夫訳『聖と俗』、法政大学出版社、1998年、195 - 196頁)。

このような偽装の解釈は、エリアーデにとって、緊急に取り組まなければならない課題であった。宗教的価値が後退することで宗教を離れた価値観が横行するようになった現代世界は、危機的状況にあるとエリアーデは考えたためである。従ってエリアーデは、偽装理論を論じることにより、現代世界に対するオルタナティブな世界観を提示しようと試みたと考えることができる。そのため、偽装理論について論じるには、偽装が読み解かれる場として設定されている現代世界についてエリアーデは如何なる問題を認識していたのか、そして「偽装」を読み解くことはその問題の解決に如何に寄与するのか、という2つの点を明確にする必要がある。

## (2) 現代社会の苦悩

では、エリアーデが認識していた現代社会の問題点とは何か。エリアーデはそれを、死を意味付けすることが困難になったことだと考えていた。エリアーデによるこのような主張は、1953年9月にジュネーヴ国際会合で発表された「宗教的シンボリズムと苦悩の価値づけ」と題する論考において展開されている<sup>19</sup>。

この論文の主題は、人間にとって根源的な苦悩である死について、宗教学の立場から考察することにある。エリアーデによれば、前近代社会における生とは、超人間的モデルに従い、祖型と一致して生きることを意味した。そこでは、外界の事象も人間の行為も、自律的本来的な価値を持つものではなかった。事象や行為は、それらを超越する実在と関わり合うことによって価値を獲得し、そのことにより真実なるものになった。このような世界観が効力を持つ生活圏では、死も一つの意義を持ち、そのものの価値が議論されえないような秩序体系の中に組み込まれていたのである。

しかし宗教が影響力を失った現代社会では、死が宗教的解釈から解き放たれることで野放しの状態となった。そのため個人は宗教の領域から離れた場所で死と対峙して、それを自分で解釈しなければならなくなったのである。現代社会では、死は一人一人の人間が解決すべきプライベートな問題となったといえる。このような現代社会において、多くの人間はプライベート化された死を持って余し、それを意味付けすることが困難になっているという<sup>20</sup>。エリアーデは、生死の問題が組織宗教

---

<sup>19</sup> M. Eliade, *Myth, Dreams, and Mysteries* (Harper and Row, 1960), pp. 231-245. 岡三郎訳『神話と夢想と秘儀』、国文社、1994年、68 - 86頁。

<sup>20</sup> エリアーデによるこのような見解が正しいか否かについては、賛否両論あると思われる。宇都宮輝夫『生と死の宗教社会学』（ヨルダン社、1998年）では、現代社会では死や老いがタブ

から解き放たれて、私事化する傾向にあることには異を唱えない。しかし現代社会の個々人が、私事化した死を恐怖の対象としてのみ理解し、その恐怖に翻弄されるような状態にあることは決して望ましい状況ではなく、克服すべき課題だと考えた。この問題を解決するためにエリアーデがとった方法は、西欧世界と非西欧世界が生や死の解釈方法について対話して、相互に学び合うということであった。そこでは、死後生を前提とする文化を未開で非科学的だとみなすのではなく、死後生を設定することが人間の文化にとって如何なる意味を持つのか、ということについて考えることが目的とされている。そのためにも、「地方的」である西欧の死生観に固執するのではなく、非西欧社会の死生観から学び取ろうとする努力が必要であると結論されている<sup>21</sup>。

### (3) 偽装の解読

では、偽装を解読することは、死に恐れ戦く現代社会の苦悩を如何に解決するのか。前節で考察した「宗教的シンボリズムと苦悩の価値付け」は、非西欧世界の宗教思想を現代社会に再定位することによりその苦悩を解決しようと試みたものであった。一方、「現代世界の神話」は、現代の西欧社会に偽装されている宗教的構造を解読することで、その問題を解決しようとしたものだと考えられる。「現代社会の神話」には、以下の一節がある。

現代社会で行われているある種の祭りは、外見上は確かに世俗的であるが、依然として神話的構造と機能を保持している。つまり新年の祝賀行事や子供の誕生後の祝い事、家屋の新築や新居への転居すら、全く新たな始まり、新生のはじまり、つまり完全に生まれ変わることに對する漠然と感じられる欲求を表明している。現代人は確かに世俗化した。しかしながら、現代社会の世俗的な祝賀がどれほどその神話的原型—創造の周期的反復—から遠ざかったものであっても、現代人は明らかに、依然としてこうした筋書きの周期的な再現に對する欲求を感じている<sup>22</sup>。

ここでは、生、死、再生を周期的に反復するイニシエーション的構造が、依然と

---

一視されるようになった、という見解に對する批判的考察がなされている。

<sup>21</sup> Eliade, *Myth, Dreams, and Mysteries*, pp. 244-245. 『神話と夢想と秘儀』、84-86 頁。

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 28. 前掲書、34-35 頁。

して現代人の生活に根強く残存していることが強調されている。同様の主張は、1973年11月シカゴのアメリカ宗教アカデミーの年次大会で発表された「死の神話学一序説」においても確認できる。そこでは、死を第二の誕生とみなす創造の周期的反復という観念が、現代人の行動においても数多く確認できることが強調されている<sup>23</sup>。

エリアーデによるこのような考察は、極めて多くの現代人の日常生活において、生と死は依然として弁証法的関係にあるものとしてイメージされていることを強調している。死のイメージは何らかの形である新たな存在形態—例えば、再生や死後生存、霊の不死性、肉体の復活—と関係付けられながら、現代人の生活で重要な役割を果たしている。ただ、宗教的シンボルとの接触が少なくなった現代人には、死のシンボルを解釈して、その創造的意味を意識化することができない。そのため、偽装されている死のイメージを解釈する手段として、宗教学的解釈学が要請されるのである。このような観点に立つと、エリアーデの偽装理論は、生の中核における死の多様な現存、非存在における存在の複雑な偽装を読み解く試みであると考えられる。

では、生の中に隠された死の象徴的意味を読み解くことは、如何なることを意味するのか。前述したように、エリアーデが考える生とは、未知なる文化的、宗教的経験との遭遇によって実存が根本的に変容されること、つまり未知の経験を組み込むことによってそれまで生きてきた世界観が変容することを繰り返す営みである。そうした生の地平において、死は未知なる経験を呼び込む通路としてイメージされる。未知なるものとしての死を通過することにより、生者の文化的展望は拡大され、それまでとは異なる生を歩むことが可能となる。換言すれば、死をイニシエーション的過程とみなしながら生を営むことは、その未知なる対象に創造へのプロセスと

---

<sup>23</sup> そこには以下のような一節がある。「さらに宗教学者は、日常生活上の数多くの行動が、死の様式や地平と象徴的に関連していることを示すことができる。闇の奥へと突き進むこと、光りへと乱入すること、これらの全ては、死との出会いを象徴する。(中略)。重要なことは、例え無意識的にであれ、これらの象徴的意味が我々の生活の中で決定的な役割を演じている、ということである。このことは、我々はこのような想像の世界から片時も離れることはできないという事実によって確証し得る。すなわち、働いたり考えたりする時であれ、くつろぎ楽しんでいる時であれ、眠って夢を見ている時であれ、あるいは眠ろうとして眠れずにいる時でさえ、決してその想像の世界から離れることは出来ないのである」(Eliade, *Occultisme, Sorcellerie et Modes Culturelles*, Gallimard, 1976, pp. 60-61. 楠正弘・池上良正訳『オカルティズム・魔術・文化流行』、未来社、2002年、77-78頁)。

いう意味を付与することなのである。

## 6・エリアーデ宗教学と現代の死生観

最後にこれまでの考察を踏まえることで、エリアーデ宗教学の今日的意義について考察する。以下で私が提示するエリアーデ宗教学の有意味性とは、(1) 他者との絆の構築、(2) 生の意味の変容という2点である。本節では、この2点の有意味性を模索する場を、生と死をめぐる今日の議論のなかに見出したい。

### (1) 生と死をめぐる今日の議論—デス・エデュケーションの試みを中心に—

歴史家のフィリップ・アリエスは、20世紀を転倒された死の時代だとみなした<sup>24</sup>。即ち、そこでは死の現実性を社会のあらゆる場所から排除しようとする企図が支配している。かつて死を飼いならしていた全ての装置がその役割を果たさなくなる中で、現代社会は死を如何に扱ってよいのか途方にくれている。そして死の恐怖が無防備の個人に直接的に襲いかかる。アリエスによる転倒された死の時代とは、近代以降におけるこのような死の扱われ方を意味している。

しかし20世紀も後半となると、死のタブー化を打破しようとする試みがなされるようになった。その代表的な試みとしては、キューブラー＝ロスやレイモンド・ムーディ、カーリス・オシス、アルフォンス・デーケンという医師や哲学者による運動が挙げられる。キューブラー＝ロスが『死ぬ瞬間』を著したのが1969年、ムーディが『かいまみた死後の世界』を著したのが1975年。オシスがエルレンドゥール・ハラルドソンと共に『人は死ぬ時何をみるのか』を出版したのが1977年、デーケンが「死を考えるセミナー」を開始したのが1982年である。死について積極的に語ろうと試みられたこれらの時期は、エリアーデが偽装理論について積極的に論じた時期と重なる。そのような時代状況の内に位置付けて偽装理論を読み解くことで、エリアーデがそこにこめた意図が明らかになると私は考える。以下では、今日の死生学、特にデス・エデュケーションの試みが有する問題点を指摘し、エリアーデの死生観をそれに対するオルタナティブな方法として提示することを試みる。

---

<sup>24</sup> P. Aries, *L'homme devant la mort*, Seuil, 1977. 伊藤晃・成瀬駒男訳『死を前にした人間』(みすず書房、1990年)を参照。

日本において、死生学はデーケンが始めた「生と死を考える会」などの活動により広く認知されるようになった。デーケンによれば、死生学は哲学や医学、心理学、文化人類学などといった幅広い分野の専門家によって究明されるべき学問であるが、それと同時に社会における実践的要望に応答できるものでもなければならぬ。つまり、死生学の学的成果は、学校教育や病院、福祉施設などの場で普及されるべきものとして考えられている。その死生学の実践段階として想定されているのが、「死への準備教育（デス・エデュケーション）」である。デーケンによれば、デス・エデュケーションの目的は、死をみつめながらよりよく生きることである。『死とどう向き合うか』の第1章「死をみつめるー死生学とは」において、「人生を再認識するための「死への準備教育」と題される節では、以下のように述べられている。

もちろん私たちは、死そのものを前もって体験的に知ることはできません。しかし、死を身近な問題として捉えて生と死の意味を深く考えようとしたり、自分自身の死や愛する人の死についてどう備えるかという心構えを学ぶことは、いつからでも始められます。それはまた、すべての人が生涯のそれぞれの時期に合わせて行うべき教育ともいえましょう。（中略）。私たちは死を見つめることによって、自分に与えられた時間が限られているという現実を再認識することができます。それは毎日をどう生きていったらよいかと改めて考えることですから、「死への準備教育（デス・エデュケーション）」はそのまま「生への教育（ライフ・エデュケーション）」に他ならないともいえます。これが、死生学の実践段階として「死への準備教育」が必要とされる主な理由です<sup>25</sup>。

デーケンによるこのようなデス・エデュケーションでは、死は人格を発達させる重要な契機であり、よりよく生きるためには不可欠な要因として考えられている。このような死の意味づけは、一見死を受容しているようにみえるが、社会で生活する者にとっての有意味性や価値に基づいて死を論じようとする態度が前提とされている。つまりデス・エデュケーションは人格が発達する領域である生と、生を中断する死という二項対立的図式を前提としており、その議論の焦点は生の領域に向けられていると考えられる。このようなデス・エデュケーションにおいては、生きる望みを社会に見出せない者、生の価値を至上としない者の問題が正面から論じら

---

<sup>25</sup> アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか』、NHK 出版、2006年、21 - 22 頁。

れることはほとんどない<sup>26</sup>。エリアーデによる死生観も死をイニシエーションとみなすことでよりよい生を営む術を提示しているという意味では、デス・エデュケーションと同様に、その軸足を生者の領域に置いている。

## (2) 他者との絆の構築と生の意味の変容

では、エリアーデ宗教学が提示するよりよい生とは如何なるものか。それは、他者との絆を構築して、その絆のうちで死と対峙しながら生を営むことであると私は考える。この絆は、人間の普遍的本性としての宗教性を明らかとすることで構築可能となる。すなわち、新生としての死へ向かうものとして生を理解することは、偽装理論において確認したように、不可逆的な時間を超克したいという人間の普遍的本性に基づく。そのような普遍的本性を自覚しながら生を営むことは、個別的なものとみなしていた自己の生が、数多くの先行人や同時代人も有していた循環する生命観という普遍的観念を共有していることを自覚することに同義である。その自覚により、数多くの「他者」との間で相互理解に基づいたコミュニケーションが可能となるのである。

他方、エリアーデが想定する生の営みは、現世の終着点である死によっては中断されることがない。生命は死を経ることにより、その形態を変えながらも存続するのである。エリアーデの死生観のこのような側面は、生に至上の価値をおかない者、死後生存を強く信じなければ生きる希望を見出せない者へ向けられている。そこでは、死が生を終局的断絶であることを否定し、死後生に高い価値を置く生き方が提示されている。前述したようにエリアーデは、このような死生観を西欧社会に置きなおすことで、西欧の死生観が持つ意味領域を拡大しようとしたのであった。エリアーデの死生観におけるこのような側面は、生の意味の変容と呼べるであろう。

他者との絆の構築と生の意味の変容というこれらの概念は、聖や死後生存という宗教的要素をその内に含んでいるが、特定教団への信仰を前提とするものではない。私は、エリアーデのこのような死生観は、現代の時流にある程度一致すると考える。

---

<sup>26</sup> デス・エデュケーションに対する同様の批判は、津城寛文「臨死が問いかけるもの—「マイヤーズ問題」の回帰」(『<霊>の探求』、春秋社、2005年、105-144頁)などにおいてもなされている。また、堀江宗正「心理学的世界観の臨界点—キューブラー＝ロスをめぐる」(『死生学研究』、東京大学大学院人文学社会学系研究所、2006年、36-61頁)も、キューブラー＝ロスの死生学について同様の傾向があることを指摘している。ただ堀江論文は、生の領域に軸足を置いたキューブラー＝ロスのセラピーが、次第に死後生を肯定するようになる過程について論じたものである。

近年に行なわれた世論調査では、貴方は何か宗教を信じているかという問いに対して、信じていると回答した割合は、1994年には26.1%、2001年には21.8%、2005年には22.9%であった<sup>27</sup>。一方、読売新聞社が1994年に行なった世論調査によると、死後も霊魂は存在すると思うかという質問に対して、35%の回答者が存在すると答え、33.2%の回答者がなんとも言えないと回答した<sup>28</sup>。存在しないと回答したのは、29.9%であった。また、香山リカによる2006年における大学生を対象としたアンケート調査では、前世や生まれ変わりを信じているかという質問に対して、信じていると答えたのが56%、信じないという解答が14%、分からないという解答が30%であったという<sup>29</sup>。もちろんこれらの調査結果は、調査対象の規模や調査目的が一律ではないため、その取り扱いには注意が必要である。しかし少なくとも、これらの調査結果は、現代における以下の3つの傾向を示していると考えられる。

- (1) 特定の教団に対する信仰を持っている人間は、現代社会では少数派に属すること。
- (2) 死後生存を信じる人間の割合は、特定の宗教を信仰している人間の割合を上回っていること。
- (3) 死後生存を否定する人間の割合は、多数派ではないということ。それ以外の人間は、死後生存を肯定しているか、即答することを避けている。

もちろん実体としての有無を検証することができない死後生について「信じる」という場合、その存在に対する如何なる程度からの確信を「信じている」とみなすのか、という問題が検討すべき課題として浮上する。しかしサブカルチャーや新霊性運動と呼ばれる領域において、死後生について盛んに発言される傾向にあることは、近年の多くの研究が示すとおりである<sup>30</sup>。このような現象は、宗教教団が提示する死生観の説得力が低下することに平行して、宗教教団から離れた場所で発言

---

<sup>27</sup> 石井研士「世論調査資料」(『現代日本人の宗教』、新曜社、2007年)、13頁。

<sup>28</sup> 前掲書、20頁。

<sup>29</sup> 香山リカ『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』、幻冬舎新書、2006年、23頁。

<sup>30</sup> 例えば、島藺進『スピリチュアリティの興隆—新霊性文化とその周辺』(岩波書店、2007年)などを参照。その他に、必然的に死後生存をその内に含む前世という観念は、現代の日本社会において少なからず言及される傾向にある。江原啓之に関するテレビ番組や出版物は言うまでもなく、自己啓発書と呼ばれる類の本には、前世について語られているものが少なくない。例えば、若い女性層を中心に非常な人気を博しているエッセイスト佳川奈未や浅見帆子の著書は、前世やスピリチュアルな存在について盛んに論じている(佳川奈未『あなたの幸運を約束するソウル・ミッション』、大和出版、2007年や浅見帆子『あなたは絶対！守られている』幻冬社文庫、2006年などを参照)。

される生死についての言葉が魅力あるものとして現れてきている結果と考えられる。そのようなことを考慮すると、現代人は必ずしも特定の宗教を信仰しているわけではないが、死後生存を生涯にわたり一貫して否定し続ける人間は、決して多くはないと考えることができる。

### (3) 結論と今後の課題

前述したように、デス・エデュケーションは、その軸足を生の領域に置いている。そのことは、デス・エデュケーションによっては、生の価値を至上とすることがない人間、死後生を信じざるを得ない状況に追い込まれた人間の要望を満たしえない可能性があることを示唆している。生の価値を至上とすることがない人間に対して、死を見つめてよりよく生きようなどといっても聞く耳をもたない可能性が高いためである。もちろん私は、デス・エデュケーションによる実践活動を全て否定するつもりなど全くない。しかし、デス・エデュケーションに対するオルタナティブな方法の一つとして、客観的事実としての死後生の有無は保留するとしても、特定の教団に対する信仰を前提としない「死後の世界」を射程に入れた生き方の探求があってもよいのではないだろうか。エリアーデ宗教学が提示する死生観は、そのような生き方への問いに応答し得る可能性を有していると私は考える。

他方、本稿で提示した二つの概念、他者との絆の構築と生の意味の変容は、その内容が相反する故に、両立し得ないのではないかという批判がなされるかもしれない。すなわち他者との絆の構築は、現世におけるよりよい生を模索している。他方、生の意味の変容は、現世における価値を死後生を設定することにより相対化しようとする試みである。両者の方向性は、現世に対する態度をめぐり相容れない関係にあるように思われる。

しかし私は、エリアーデが提示する人間像を媒介とすることで、二つの概念は接合可能になると考える。エリアーデの人間像とは、全ての人間は宗教的志向を有する故に、宗教的人間であるというものである。全ての人間が有している宗教性とは、自己及び自己を取り巻く世界が存在するという事実を説明するために、神話や儀礼によって外界を意味付けしようとする普遍的本性である。世界に与えられた意味は、その世界と関係する自己を意味付けるものでもあるため、実存を規定するものである。それ故にそれは、自己の存在にとって不可欠な聖なる世界として認識されるのである。

このような聖の機能に従えば、社会は人間の主観的意味付けによって絶えず構築

される主観的現実であるとみなされる。しかし一端構築された社会は、多数の人間が参与して、それぞれの利潤を追求する場である故に、個人を超えた力を持つ。その力は、時には個人を抑圧する客観的事実として作用する。そのような社会の力に対して、エリアーデが提示する宗教的人間は、宗教性に再び訴えることにより現実についての異なる解釈を導き出そうと試みる。従ってエリアーデが想定する人間像とは、社会を構築してその中に存在しようとする側面と、自己を抑圧する社会が提示する世界観とは別な世界を構築しようとする側面をもっている。そして相反するこの二つの側面は、聖を希求する宗教性によって接合されている。これらの相反する二つの側面は、本稿で検討した死生観における二つの側面とパラレルな関係にあるように思える。すなわち、社会を構築する側面は他者との絆の構築と、異なる世界を構築しようとする側面は生の意味の変容とそれぞれ対応する。換言すれば、宗教的人間による二つの側面を死生観の地平においてみると、他者との絆の構築と生の意味の変容として読み解くことができるのである。

しかし、この問題についての具体的考察は、今後の研究で取り組むべき課題としたい。また、本稿では文学においてエリアーデは如何なる死を叙述しているのかという問題について考察することがなかった。この問題も今後の課題としたい。

---

#### キーワード：

死後生、現代世界の神話、イニシエーション、死への準備教育、  
聖なる者の偽装

#### KEYWORDS:

After life, Myth of the modern world, initiation, death education,  
camouflage of the sacred